

臨床研究支援センターは、国のルール(厚生労働省令)に従った信頼性のある治験の実施を支援することを目指しています。

治験(薬の場合)とは、新たに開発・製造された薬を国から「医薬品」として承認してもらうために行う人を対象とする医学研究です。

治験では、患者さんにとって、わかりにくい研究方法が採用されます。その方法とは、「無作為化二重盲検比較試験」という研究方法で、その説明を以下に記載します。

比較試験

新薬が有効で安全であることを証明するためには、標準となる薬(対照薬)と比較しなければなりません。対照薬は2種類あって、「標準薬」と「プラセボ(偽薬)」です。「標準薬」は、現在使用されている最も有効かつ安全な医薬品です。一方、「プラセボ」は、新薬の成分が入っていないもので、病気への効果もなければ、副作用もな

いことになります。ただし、この「プラセボ」を薬だと思って飲むと病状が改善することがあり、これを「プラセボ効果」といいます。新薬の成分が本当に効いているのかは、このプラセボ効果を差し引かなければいけません。

無作為化

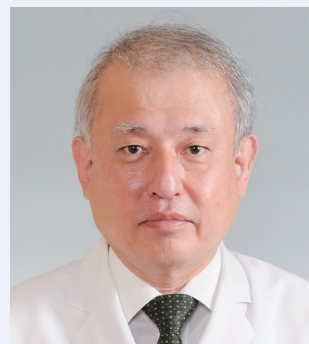
患者さんを新薬と対照薬にどのように振り分けられたいでしょうか。患者さんは皆さん新薬を飲みたいはずですが、対照薬を飲む方がいないと比較になりません。では、重症な方を新薬に、軽症な方を対照薬に割付けられたいと思っても、それは、病気への効果をみる指標が治験開始前から異なりますので、比較できません。つまり、新薬と対照薬を飲むグループの方々は、治験開始前の病気に影響する指標を同じにしなければなりません。その割付け方法として、コンピューターを用いて、何の条件も考慮せず、自動(無作為)にどちらかのグループ

に割付けることを無作為化といいます。

二重盲検

患者さんが、自分の飲んでる薬が「プラセボ」とわかったらプラセボ効果がなくなります。一方、治験を行う先生が、患者さんがどちらを飲んでるのかを知っていると、その効果や副作用に先入観が入り、正しい評価を行えなくなります。そこで、患者さんがどちらを飲んでるのか、先生がどちらを投与しているのかを治験が終了するまでわからない状態にすることを「二重盲検」といいます。そのために、新薬と対照薬の色、形、大きさ等を同じにします。

近年、画期的な新薬が続々誕生していますが、それらは治験を最終段階として有効性と安全性が証明されたものです。多くの患者さんに治験を理解していただいたうえで、福岡大学病院での治験へのご協力をお願いいたします。

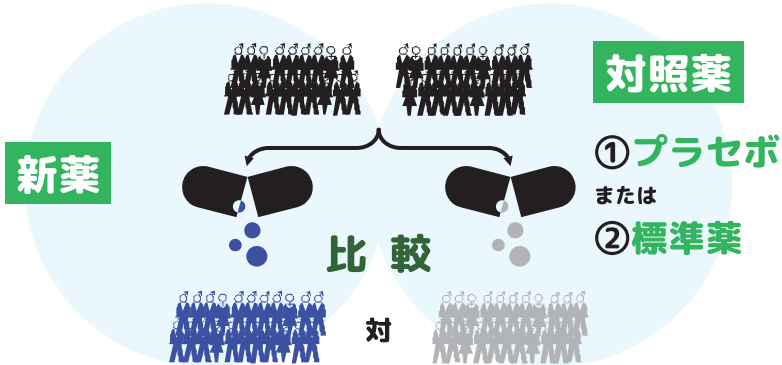


臨床研究支援センター
センター長

医師 野田 慶太

のだ けいた

無作為割付比較試験



福大病院

ニュース

No.134

Fukuoka University Hospital News

2026
新年号
WINTER

2026 年

新年のごあいさつ

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

旧年中は格別のご厚情を賜り、心より御礼申し上げます。

福岡大学病院は、特定機能病院・災害拠点病院として、患者中心の「あたたかい医療」を理念に掲げ、安心・安全で質の高い医療の提供に全職員が一丸となって取り組んでおります。

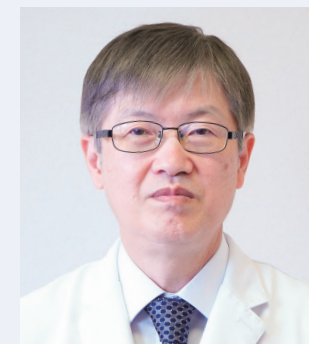
2024年5月には本館を開院し、手術室の増室に伴い手術件数も増加いたしました。ロボット支援手術は、従来より「ダヴィンチXi」と「hinotori」および「Saroa」にて治療を実施しておりました。さらに、2025年11月には九州では2番目となる「ダヴィンチSP」を導入しました。「ダヴィンチSP」は従来型で必要とされた4本のアームが、単一ポート(1本アーム)での操作となることで、より侵襲の少ない手術が可能となりました。これにより、患者さんの身体的負担や術後痛が軽減され、回

復の早期化が期待されます。また、整形外科領域では、手術支援ロボット「Mako」に加え「ROSA」も使用し、実績を着実に伸ばしています。さらに、ハイブリッド手術室の増設に伴い、脳・心血管疾患に対する低侵襲カテーテル治療にも注力しております。加えて、がん化学療法や救急搬送の受け入れにも積極的に取り組んでおります。本館の開院に伴い、現在、中央棟の一部で改修工事を進めており、ご不便をおかけしておりますが、来夏には終了予定です。

昨年は、総合周産期母子医療センター新生児部門において、クラウドファンディングによる新たな取り組みを実施いたしました。当院のNICUは白色を基調とした無機質な空間で、保育器やベッド周囲に仕切りがなく、ご家族が周囲に気兼ねしながら新生児を見守る環境でした。「赤ちゃんをご家族が安心して過ごせる空間をつくりたい」という職員の思いから本プロ

ジェクトが立ち上がり、壁面への温かみのあるイラスト装飾や、音や視線を柔らげるロールスクリーンの設置など、優しい空間づくりを進めております。クラウドファンディングは終了しましたが、多くの方々にご賛同・ご支援いただき、心より感謝申し上げます。

私は、2025年12月に病院長を再任され、病院執行部も新体制となりました。今後も患者さん一人ひとりに寄り添い、質の高い医療提供の維持・向上、さらには救急医療のさらなる充実に努めてまいります。職員の専門性向上や適正な労働環境の整備による医療体制の効率化、健全な病院経営にも引き続き取り組み、病院の発展に向けて全力で邁進してまいります。皆様の変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



病院長

医師 三浦 伸一郎

みうら しんいちろう



ダヴィンチSP



Open! 当院では、
各種SNSを
開設しています!

4 福大病院ニュース

公式YouTubeチャンネル
<https://www.youtube.com/channel/UCYwMO3PwlaDYNvXTXVUocA>



Facebook
<https://www.facebook.com/FukuokaUniversityHospital/>



X (旧Twitter)
<https://x.com/Fukuokaunivhosp>



instagram
<https://www.instagram.com/fukuokaunivhosp/>



福岡大学病院

〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目 45 番 1 号
TEL (092) 801-1011 (代) URL: <https://www.hop.fukuoka-u.ac.jp/>



本館移転部署（薬剤部）のご紹介

最新技術と知識で医療を支える“薬”のプロフェッショナル

当院薬剤部は、本館への移転を機に新たな環境で活動を開始しました。4階の調剤室は、九州初となる最新の医薬品デジタル管理システムを導入し、2階の薬品情報室は、機能的なOAフロアを整備しました。これにより、正確かつ効率的な薬の管理と、迅速で活発な情報提供が融合し、医療の安全性が一層向上しています。

医療の安全を守る仕事

薬剤師の仕事は、薬を準備する調剤室の中だけではありません。薬の専門家として、病棟での服薬支援や副作用の確認、薬物治療の流れに合わせた医師への提案など、患者さん一人ひとりを支える“縁の下の力持ち”として働いています。年間4万件を超える面談を通じて、すべての入院患者さんに安心して治療を受けていただけるようサポートしています。がん治療では、薬剤師外来を開設し、院外の保険薬局と連携した積極的な治療にも取り組んでいます。

新技術導入と高い評価

九州初のシステムでは、全ての薬をバーコードで一元管理し、購

入から投与までの正確な追跡が可能です。薬の取り揃えは自動調剤ロボットや専門スタッフが担い、薬剤師が患者さんとの対話に集中できる環境を整えました。こうした体制は、外部からも高く評価され、病院機能評価（薬剤管理機能）で最高のS評価を獲得しました。さらに、医療DXとして、電子処方箋を発行しており、今後は生成AIの活用も進め、スマートかつ安全な医療をめざしていきます。



散薬調剤ロボット「DimeRo II」

未来を育む教育力

薬剤師の強みは、日々更新される薬学の知識です。職員の多くは、薬剤師資格に加え専門や認定の上位資格を持つダブルライセンス保持者であり、高度化・複雑化する

医療ニーズにも的確に対応しています。また、職員の約3割が博士号の取得者であり、大学と連携した高い研究力を有しています。さらに未来の薬剤師の育成にも注力しています。その中核である「薬剤師レジデント制度」は20年の歴史があり、特定機能病院としての高度な教育と実践的な研修を受けた修了生は全国で活躍しています。

そして未来へ

私たちの活動は、院内だけにとどまりません。災害時の支援や薬剤師が不足している地域への出向事業など、地域医療全体の質の向上にも貢献しています。私たちの役割は、薬という“モノ”を扱う仕事から、患者さん一人ひとりと向き合う“ヒト”を中心とした仕事へと大きくシフトしています。

薬剤部は、これからも患者さんの安全と安心のために進化を続けます。薬のことでお困りの際は、どうぞお気軽に私たち「薬のプロフェッショナル」にお声かけください。



薬剤部
副薬剤部長・薬剤師長
薬剤師 池内 忠宏
いけうち ただひろ

本館移転部署のご紹介

臨床検査・輸血部のご紹介

臨床検査・輸血部は、緊急・輸血検査、血液・一般検査、臨床化学・遺伝子検査、細菌検査、生理機能検査、輸血管理、治験・検査相談室、事務部門に分かれて医師、臨床検査技師、事務職員の約60名が所属しています。本館移転に伴い、生理機能検査は本館2階（J2）に、検体検査、細菌検査、輸血管理等は本館4階に移転しました。当部では、患者さんが安全な高度医療を受けられるよう精度や信頼性の高い検査結果や情報を迅速に提供し、診療各科における診療に役立つよう努めています。先進医療や、医療の専門化が進む中、多くの臨床検査技師が、知識と技術を一層深めて各種学会が認定する資格を取得し専門性を持って各種検査業務に携わっています。2014年に国際規格ISO15189を取得し、国際的にも制度の保証された臨床検査結果を提供する検査室と認められています。また教育研究機関として関連する学生の教育に関する役割も担っています。

検体検査部門

24時間、365日、緊急性の高

い項目の測定や安全な輸血を提供するために必要な検査を行うなど急患や急変への対応、自動分析システムを用いた検体の前処理から分析、1時間程度での迅速かつ正確な報告、血球の計測、形態判定及び血栓・止血関連検査など様々な検査によって診療に貢献しています。また、測定だけではなく日々の機器のメンテナンスや精度管理を徹底するなど測定値の信頼性を確保するための体制が整っています。

細菌検査部門

血液、尿、喀痰、便、膿などの検体から、感染症の原因細菌の同定、薬剤感受性などを報告します。また院内の感染対策のチーム医療に参加して感染予防に努め、地域と連携して感染対策活動を行っています。

生理検査部門

循環機能検査、呼吸器機能検査、神経系電気生理学的検査があり患者さんと接しながら安全に直接身体機能を検査します。心電図検査、超音波検査、呼吸機能検査、

脳波検査などが主な検査です。高度な技術を持って検査を施行し、また対象診療科のカンファレンスなどに参加し診療、研究にも携わっています。

輸血管理部門

2015年に輸血機能評価認定（I&A）を取得し、輸血管理についての安全性が保証されています。輸血は臓器移植の一つと言われる、また血液製剤も限られた資源です。病院全体の安全で適切な輸血療法を目標に適正輸血の確認、血液製剤の品質管理、副反応発生時の対応などに努めています。

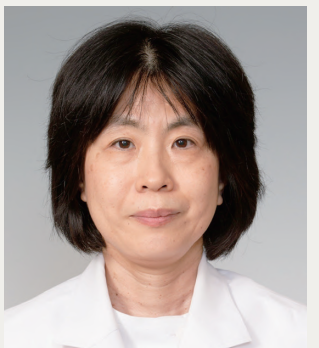
治験・検査相談

医療従事者（医師、看護師、薬剤師など）を対象に診療側からの臨床検査に関する問い合わせや相談に対応しています。相談内容は検査項目情報や採取容器についてなど多岐にわたっており、個々の問い合わせや相談に対応して、診療支援を行なっています。

臨床検査・輸血部は福岡大学病院の理念“あたたかい医療”に貢献できるよう、スタッフ一丸となって努めて行きます。



臨床検査・輸血部スタッフ



臨床検査・輸血部
副部長
医師 森戸 夏美
もりと なつみ



4階 調剤室「医薬品デジタル管理システム：McHIL」



2階 薬品情報室（機能的OAフロア）